

聖書：コリント人への手紙第一 15：29～34

説教題：目を覚まして正しい生活を

日時：2023年2月12日（朝拝）

今日の箇所は講解説教でなければなかなか説教されない箇所ではないでしょうか。というのも最初の 29 節に「死者のためのバプテスマ」という言葉が出て来ます。これは一体何でしょうか。死んだ人に洗礼を授けるということでしょうか。あるいはすでに世を去った人々の救いのために地上に残っている者たちに何かできるということなのでしょうか。思わず当惑してしまいます。ですから進んでここから説教する人はあまりいないと思います。私も過去のイースター礼拝でこの前の箇所と後の箇所を取り上げて説教したことはありますが、この箇所はまだです。こういう箇所も、強いられてではありますが、飛ばさずに読んで行くというのが講解説教の良いところかと思えます。

さてではこの死者のためのバプテスマとは一体何でしょうか。色々な解釈がありますが、初めに申し上げますと結論的には良く分かりません。確実にこうであると言い切れる人はいません。主に三つの見方があるようです。まず一つ目は、これを死んだ人のための代理洗礼と見る見方です。その死んだ人はバプテスマすなわち洗礼を受けないまま死んでしまった。その人のために地上に残っている人が代わりに洗礼を受けるということです。果たしてそんな考えは認められるのかと私たちは驚くかもしれません。まず、形だけでも洗礼を受ければ、それでその人は祝福されるという考えは魔術的な理解ではないかと私たちは思います。これに対してある人は、ここで考えられている死者は全くの未信者ではなく、信仰を持っていた人だろうと言います。信仰は持っていたが、あるいは洗礼を受ける準備はしていたが、思わぬタイミングでの死によって受洗がかなわなかった人のための代理洗礼ではないかと。だとしても疑問は残ります。果たして他の人のために代わりに洗礼を受けることなど認められるのだろうか。この解釈を取る人たちが言うことは、もちろんパウロはこのような洗礼を認めていたわけではない。それが誤りであることはその通りである。しかしコリント教会の中には、12 節で見たように、死者の復活はないと主張する人たちがいました。その彼らに対してパウロは、コリント教会で行われていた（かもしれない）死者のためのバプテスマという実践を取り上げて、もし死者の復活がないなら、こういうことはしないはずでしょう！と言っているだけであるということです。パウロはこの慣習を是

認してはいないのですが、死者の復活はないと主張する人たちの矛盾を突くために、それなら「死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何をしようとしているのですか。死者が決してよみがえらないのなら、その人たちは、なぜ死者のためにバプテスマを受けるのですか」と問うているだけであるということです。

二つ目の理解は、これを通常の洗礼と見る見方です。この解釈を取る人々はこの「死者」を「霊的な死者」と取り、これは洗礼を受ける前のクリスチャン全員を指すと考えます。なるほどそう取れば地上を去った人に関係する洗礼ではなくなり、難問はパスできます。しかしこれはあまりに問題をうまく回避しようとしてなされた不自然な解釈であるという感を拭えないのではないのでしょうか。

三つ目は「死者のために」という言葉を「死者のゆえに」という意味に取る理解です。つまり死んだ人本人に益をもたらすバプテスマではなく、死んだ人のゆえに地上にいる者たちが受けるバプテスマを指すという理解です。どういうことかと言うと、ある人は信仰を持って死にました。その家族はその人の信仰の生涯を見て、その人とやがて天国で再会したいと願います。その死者のために、その死者のゆえに、地上にいる者たちも洗礼を受けるということです。あるいは家族でなくてもそういうことが起こり得ます。良い証を残して地上を去ったクリスチャンの姿のある人たちは見ます。その死においても輝きを放つ信仰を見ました。その死者のゆえに、死者に導かれて洗礼を受けるということです。

最初にも触れた通り、残念ながら決定的な答えはありません。学者たちの意見は見事に色々と分かれています。しかしパウロの言いたいポイントははっきりしています。どれであるにせよ、このバプテスマは死者のよみがえりを前提にしているということです。そういう実践がコリント教会の中で、あるいは彼らが良く知る人々の間で行われていたこと自体、死者の復活はあることを示しているのではないか。「死者の復活はない」とする人たちの主張と矛盾するのではないかということです。

もう一つ、死者の復活がないとすると説明がつかなくなることとしてパウロがあげているのは使徒たちの犠牲的奉仕です。30節でパウロは「なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか」と言います。パウロたちがその身を危険にさらしながら奉仕していたことはこの手紙でも色々なところに示されていました。たとえば 4

章9～13節に「神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました」とか、「私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました」という言葉がありました。もし復活がないなら、このような奉仕に何の意味があるでしょうか。さらに31節でパウロは「私は日々死んでいるのです」と言います。これもパウロたちの苦闘ぶりを表現したものです。その際、彼は「私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが」と言います。ここでパウロはコリント人たちのことを主にあって誇りとしているという自分の思いを吐露しています。この手紙の9章1節にコリント人たちを指して「あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか」というパウロの言葉がありました。コリント人たちはパウロの働きの実でした。これは人間的な誇りではなく、主にあって彼が持っている誇りです。すなわち主の恵みによってパウロはコリント人たちの救いに仕えることができました。その彼らをパウロはキリストにあって誇りとしていました。色々と問題の多かったコリント教会ではありましたが、パウロは彼らに対してこのような気持ちを抱いていたことが分かります。その誇りにかけて私は誓うとパウロは言います。人は自分が大事に思っているものにかけて誓います。パウロはコリント人たちのことを本当に心にかけています。だからこそ彼らのために苦難を厭わず、「日々死んでいる」という奉仕の生活をささげていました。しかしもし死者の復活がないとしたら、このことに何の意味があるかとパウロは問うのです。全く意味のない、無駄な苦しみを受けていることになります。

さらに32節には「エペソで獣と戦った」時のことが触れられます。これも何のことだろうと戸惑わずにいられない表現です。これはパウロが闘技場でライオンのような獣と戦わされたということなのでしょう。パウロはローマ市民権を持つ人で、ローマ市民はそういう扱いを受けることはありませんでした。もし何らかの理由でそのような罰を下された場合、ローマ市民権は剥奪されたようです。しかし使徒の働きを読むと、このコリント書を執筆した後もパウロはローマ市民権を用いています。またもし本当にそのようなことがあったら使徒の働きにその記録がありそうですし、コリント人への手紙第二でパウロが苦難を色々列挙するところにも、それは記されると考えられます。ところがそれはありません。ですからこれは象徴的な表現であると見るのが良いと思われます。当時の書物にも同じような表現が見られるそうです。パウロはこれによって、まるで獣と戦うかのように、血に飢えた敵対者たちによって引き裂かれそうになる苦難を受けたことを語っているものと思われます。コリント書第二1

章8～9節：「兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。」

パウロは「人間の考えからエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう」と問います。すなわち復活はないとする人間の考え方に立てば、このような苦しみを受けることはナンセンスです。むしろ 32 節後半にあるような生き方をすることが得策であるということになります。すなわち「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから。」 復活がないとしたら、こういう刹那的な生き方に行き着いてしまいます。生きることができるのは今だけである。明日はどうなるか分からない。死んだら終わり。だから今日自分を楽しませることに集中しよう。今、楽しいことが一番であると。

この言葉はイザヤ書 22 章 13 節からの引用です。イザヤ書の文脈では、イスラエルは罪のゆえにアッシリアに包囲されていました。イスラエルはそのことで悔い改めるべきでした。ところがイスラエルはそうでなかったことが言われています。イザヤ書 22 章 12～13 節：「その日、万軍の神、主は呼びかけられた。『泣いて悲しみ、頭を剃って粗布をまとえ。』 しかし、なんとおまえたちは浮かれ楽しみ、牛を殺し、羊を屠り、肉を食べ、ぶどう酒を飲んで言っている。『飲めよ。食べよ。どうせ明日は死ぬのだ』と。」 まさに「将来はない。明日はどうなるか分からない。だからせいぜい楽しめるうちに楽しもう！」と彼らは言っていました。これは今日の多くの人々の生き方でもあるのではないのでしょうか。将来は分からないから、今日自分が楽しく生きること集中する方が得であると。これは将来への希望を持っていない人の生き方です。これが私たちの生き方になっていることはないだろうかと問われます。

そこでパウロは最後にコリント人たちに向かって勧めます。33 節：「惑わされてはいけません。『悪い交際は良い習慣を損なう』のです。」 括弧の中の言葉は第三版では「友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます」となっていました。一般的に言ってそうです。しかしここで特に考えられているのは復活を否定する人たち、あるいはその考え方との交わりでしょう。復活はないとして、この世のことばかりに思いを

向ける人たちと交わると自分もそういう人になる。自らの生活が大きな影響を受け、本来保つべき良い習慣を損なってしまう。ですから 34 節で「目を覚まして正しい生活を」と言われます。これは酔っている状態から目を覚ますことです。将来はないと考えて、飲めや、歌えや、とこの世の楽しみにどっぷりつかり、まどろむ生活から目を覚ませ！ということです。そして正しい生活を！と言われます。これは神の御心になう生活、神に喜ばれる生活のことです。ですから「罪を犯さないようにしなさい」と続けて言われます。ウェストミンスター小教理問答問 14 に「罪とは、何ですか」とあり、その答えとして「罪とは、神の律法に少しでもかなわないこと、あるいは、それに違反することです」と述べられています。律法は神御自身を映し出すものであり、私たちが神に似る者となるためにはこの律法に沿って歩むことが必要となります。やがて私たちは神にお会いすることがこの手紙の 13 章 12 節で次のように述べられました。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることとなります。」 聖なる神と顔と顔を合わせて見るようになるために、私たちは神に似る者となるための道、すなわち律法に従う道を行く者でなければなりません。その将来を見つめ、目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにすることを祈り求め、取り組んで行かなければなりません。34 節後半に「神について無知な人たちがいます」とありますが、これはコリント人たちのことです。彼らは自分たちを知識のある人間、霊的な人間と自負していました。しかし神はキリストを復活させることによって、いよいよこの世界を最終ゴールに向かって導いておられます。そのことを思っていよいよ神にお会いする準備をする者、そのために神に似る者となる道を益々進む者でなければ本当に神を知っている人とは言えません。復活を否定し、この世の快樂に没頭する人は、神について無知な人と言わざるを得ません。「私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです」とパウロは最後に言います。厳しい言葉ですが、この言葉の前に彼らは自分は本当に神を知っている者なのかどうか、再検討・再点検するやうにと迫られているのです。

今日の箇所から私たちは、やがての復活に関する信仰は今ここでの私たちの生き方と直結していることを教えられます。もし将来の復活を見失っているなら、私たちは今ここでの「飲めや、歌えや」という地上的な快樂に重きを置く生活となります。将来のことは良く分からない。それは不確実である。それよりも今、自分を楽しませる

こと、今自分が楽しいと思えることに集中しようという生活となります。思い出すのはルカの福音書 12 章に記されている金持ち農夫の譬えではないでしょうか。豊作となり、新しい倉を建ててそこに全部しまい、自分に向かって言いました。「これで一杯物がためられた。わが魂よ。これからは食べて飲んで、楽しめ！」ところが神は彼に言われました。「愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか」と。しかし将来の復活を確信し、その日を楽しみに待ち望む人は、そうでない人々と比べて、ここでの生活は違って来るはずです。その人は地上の生活のすべてをやがての日に向けての備えと考えます。ゴールは先にあります。目標は先にあります。その日は確実に来ます。その日の幸いを見つめて、その日に向かって自分を整えるという歩みを今日もして行くでしょう。私たちの生き方はどうでしょう。復活の希望を持っていない人々と同じ生活をしていることはないでしょうか。その人々と交じり、影響を受け、その人々と何ら変わらない生活を送っていることはないでしょうか。今ここで自分を楽しませることに生活の重心が置かれ、その結果、神の前に良い習慣が損なわれているということはないでしょうか。私たちは今日の御言葉に導かれて目を覚まして、先にあるものをしっかり見つめて歩む者とされたいと思います。大なるものはこれから来ます。主の復活に基づく本格的な復活が起きる栄光の日はこれから来ます。そしてキリストは御国を完成し、それを仕上げて、神がすべてにおいてすべてとなる日が来ます。その時に聖化の歩みを全うして神の前に立たせていただく者であるでしょうか。その日を喜び見つめることによって今ここでの私たちの全生活が導かれたいと思います。復活の希望をしっかりと心に刻まれている者たちとして、神が私たちの行く先に用意くださっている素晴らしい救いを見つめて、その日へと向かう歩みをこの週もささげる者へ導かれたいと思います。「ですから、愛する者たち。これらのことを待ち望んでいるのなら、しみも傷もない者として平安のうちに神に見出していただけるように努力しなさい。」(ペテロの手紙第二 3 章 14 節)